昭和女子大学専門職大学院 公開シンポジウム
「所得と資産の格差克服のための金融経済教育の方向性―ジェンダー、ジェネレーション、キャズム」
パネルディスカッション議事録

昭和女子大学専門職大学院、金融経済教育推進機構　共催
開催日時:2025 年 9 月 26 日(金)18:30-20:30
会場:昭和女子大学 8 号館 6 階 コスモスホール

内容(**ゴシック**は本紙掲載分)

1. 開催あいさつ　昭和女子大学総長　坂東眞理子
2. イントロダクション「日本における所得・資産と金融経済リテラシーのジェンダー格差」
   太田 行信(昭和女子大学専門職大学院 特命教授)
3. 講演①「大学生・若者の金融リテラシーの現状―金融テストとアンケートを通じて見える心理的・行動的特徴の男女差」
   島 義夫氏(LEC 会計大学院客員教授／市民グループ「良質な金融商品を育てる会」(フォスター・フォーラム)理事)
4. 講演②「女子大における金融教育の現場報告」
   永沢 裕美子氏(フォスター・フォーラム世話人／お茶の水女子大学非常勤講師)
5. 講演③「金融経済教育の課題と今後の展望」
   大友 佳子氏(金融経済教育推進機構(J-FLEC)理事)
6. **パネルディスカッション「これからの金融経済教育推進の方向性 ―金融経済リテラシーのキャズムを超えるために」 各報告者**

出席者:

- 島 義夫 氏(LEC 会計大学院客員教授／市民グループ「良質な金融商品を育てる会」(フォスター・フォーラム)理事)
- 永沢 裕美子 氏(フォスター・フォーラム世話人／お茶の水女子大学非常勤講師)
- 大友 佳子 氏(金融経済教育推進機構(J-FLEC)理事)
- 【司会】太田 行信 氏(昭和女子大学専門職大学院 特命教授)

パネルディスカッション
「これからの金融経済教育推進の方向性 ―金融経済リテラシーのキャズムを超えるために」

太田:
ご報告ありがとうございました。知識を得て、意思を持って、行動を変えるというポジティブなインパクトが生じればと考え、金融経済教育を推進していると理解しております。これは我々だけが考えていることではなく、世界的なミッションでもあり、各国政府に求められている行動です。これを効果的な形で実施することが、ジェンダーギャップに限らず求められております。

それではそれぞれの報告を受け、パネルディスカッションを開始いたします。まずは、一部報告と重なる部分もあるかと存じますが、お三方にこれまでの研究と教育実践から見えてきた日本における金融リテラシーの男女差（ジェンダーギャップ）について、その背景要因は何かという点についてご意見をいただきたく存じます。それでは、私の隣にいらっしゃる永沢様からお願いいたします。

永沢：
先ほど時間切れで報告できなかったのですが、大学院生に「この男女の格差は何が原因か」という点を聞いたところ、非常に納得できる回答が二つありましたので、この機会に説明いたします。

一つは、「同じ職場であっても、得た知識を実際に活用する経験が、女性には限られてきたことが一因であろう」というものです。もう一つの意見は、「専業主婦が多かった時代、リスクを伴う金融行動を、他人が稼いだお金で行うことは自発的には難しかった」というものでした。二つの話に共通することは、やはり女性には経験の機会が限られてきたということではないでしょうか。

太田：
それでは大友様に、前職の銀行員としての実務経験、および J-FLEC における業務経験から、今の質問に対してどのようにお考えか伺いたいと存じます。

大友：
ありがとうございます。J-FLEC の活動というよりは、長きにわたり金融機関に勤めてきた実務経験を通して感じているのは、「実は女性はやりくりが非常に上手である」ということです。例えば、毎月 10 万円でローンの返済や家賃を払い、あるいは教育費や塾代を捻出して、その限られた中から「これは私のへそくりだ」と少しずつお金を残していく。こうしたやりくりは非常に上手なのですが、金融やリテラシーといった「家計の管理以外のお金」については、あまりご存じなく、関心も薄いようです。結果的にやりくり上手な方は多かったのですが、その浮いたお金でお友達とランチを楽しんだり時間を過ごしたりすることはあっても、資産形成や資産運用までは至っていなかったという印象です。

太田：
ありがとうございました。それでは島先生はいかがでしょうか。先ほどのご報告は大学生に限ったお話でしたが、それに限らず、男女差の背景と要因についてどのようにお考えでしょうか。

島：
男女差ですので、非常に複合的な要因があると考えますが、先天的な違いも当然あるでしょう。また、後天的な要因としては、育てられ方、家庭環境、学校教育が挙げられます。私の、学部の男女学生を指導した限られた経験から申しますと、家庭の影響と、これまで受けてきた学校教育の影響が大きいとの印象を受けました。

太田：
ありがとうございます。そのようなリテラシーの差が、大学生にとって将来のキャリア選択、さらには資産形成にどのような影響を及ぼすとお考えでしょうか。個人的には、リテラシーは資産運用という

狭い分野だけではなく、キャリアの選択において「より稼げるようになる」、あるいは「自己投資をしてより高度なキャリア、すなわちキャッシュフローが潤沢なキャリアを選択する」という、生き方の選択においても実利として非常に重要だと考えております。若年層の意識や態度の違いがキャリア選択や人生の過ごし方にどう影響するとお考えか、どなたかご意見をいただけますでしょうか。

島：
例えば女子学生の職業選択で、現在も憧れの職業として挙げられるのがフライトアテンダントです。それが分かった際、失礼ながら驚いたといいますか、先進国で、かつての呼称でいうスチュワーデスが憧れの仕事というのは、今や日本だけではないかと思うのです。発展途上国や男女差別が厳しい国では、唯一知的で一人前として扱われる職場として憧れの対象かもしれませんが、日本では日本航空が一度破綻したという事実があるにもかかわらず、学力の高い学生がなぜなりたいと言うのでしょうか。

これは学校教育や家庭の影響、あるいはマスメディアの影響もあるのでしょうか。女子向けの漫画やドラマなど、華やかな世界に女子を導くような、ある種の「不適切な誘導」があるような気がいたします。

また、学校教育の大きな影響も無視できません。十数年、大学教育に関わってきた経験から申しますと、教育の世界には建前と本音があり、お金や金融がどのように捉えられているか、学校の先生がそれらをどう考えているかが子供に伝わっています。率直に申し上げて、教育の世界には、お金や金融に対する偏見があると私は考えます。

先行研究を調べても、日本での心理学的分析は主に文学部や教育学部で行われていますが、それらを出た人が教師になる比率は高く、女子の比率も高いはずです。しかし、過去に発表されたお金に関する論文は非常に少ない状況です。たまに数少ない例を見ても、質問項目が「お金は諸悪の根源である」といった、金融業界からすれば驚くような内容が出てまいります。教育の世界全体に、金融を敵視するような、あるいはマルクス主義的な教え方の名残のような偏見が漠然と存在します。女子の方が真面目に学校の勉強に取り組む傾向があるため、より強い影響を受けているのではないかと推察しております。

太田：
ありがとうございます。辛辣ながら非常に重要なご意見をいただきました。行動経済学は今世紀に入ってずいぶん進歩し、伝統的な経済学と心理学のハイブリッドな領域となっています。アメリカの学界などは非常に実用的ですので、お金を偏見で見ず、逆に「なぜ人間は非合理な判断をするのか」を心理的に探求していますが、そこはまだ日本のアカデミズムと少し異なっているのかもしれません。

同じく若年層のキャリアという点で、大友様はいかがでしょうか。銀行員時代に若い世代を見てこられて、何か感じられたことはございますか。

大友：
銀行員時代は比較的男女平等に職務にあたっていたため、正直なところ大きな男女差は感じませ

んでした。むしろ女性の方が資産形成や運用に意欲的で、計画的に学ぶという意味では、銀行内でのセミナー受講率は圧倒的に女性の方が高かったと記憶しております。

ただ、住宅購入の場面に立ち会うと、つい最近まで、名義をご主人単独にされる方が圧倒的に多かったと感じております。女性が働いていても男性名義での購入が非常に多かったのです。金融資産ではなく不動産資産という意味では、男性名義のものが多いのかもしれないと、本日のお話を聞いて改めて実感いたしました。

太田：
ジェンダー格差には心理的要因や社会制度、慣習など、さまざまな要因が絡み合っているのですね。永沢様はいかがでしょうか。

永沢：
お茶の水女子大学の大学院生たちは「金融教育を受けたい」という動機で来校しており、その根底には「経済的な自立」があります。私自身を振り返っても、金融界で働くなかで目覚めたきっかけはそこにございます。親の世代は「教育は花嫁道具の一つ」という考えで、私もなんとなく文学部に進学いたしました。しかし、自分の進路を選択する際に、経済的に自立できなければ望むような人生を描けないと、成長の過程で気がつきました。

人間として重要な選択をする際に、経済的な基盤がなければ自立も選択もできません。そこは女性にとって非常に重要な点です。先ほど坂東総長がイプセンの『人形の家』の話をされていましたが、まさに女性の自立はそこから始まるのだと存じます。

太田：
行動経済学でも、女性はリスク回避的で慎重であるという傾向が示されています。女性がリスクを避けたり不安を感じやすかったりする点について、何かお気づきの点はございますか。

永沢：
女子学生には優等生として育ってきた者が多く、「失敗をしたくない」という思いが強いように見受けられます。家庭教育のなかで「女の子なのだから」と型にはめられ、リスクを取らないようにと、失敗を恐れる気持ちが根底にあるのではないかと推察しております。

島：
専門的な知見があるわけではありませんが、女性は子供を産み育て、人類を存続させる役割がありますから、リスクをテイクするよりは避ける行動が多いというのは、生物学的に自然なことなのかもしれません。

太田：
大友様はいかがでしょう。ビジネスにおいて、積極性や自己アピールが有利に働く面もありますが、女性をリーダーシップのポジションに引き上げる際、何かご経験はございますか。

大友：

拙い経験ながら、女性職員には「承認欲求」が高い方が多かった印象がございます。自身の仕事を認めてほしい、価値を理解してほしい、結果だけでなくプロセスも評価してほしいという声です。そのため「プロセスをしっかり見ているよ」「現在取り組んでいることは確実に次に繋がるよ」という指導を心がけてまいりました。先ほどの島先生のお話にあった「計画的な行動」も、彼女たちにとってはプロセスを積み上げることの一環であったのかもしれません。

永沢：
大友様のお話に同感いたします。社外取締役として女性活躍を推進するなかで、女性にチャンスを提供しても、より高く認められたいという気持ちが強すぎて「準備をしすぎてしまう」ことがございます。その結果、リスクを取らずチャレンジを控え、新しいことに踏み出せない。チャレンジを周囲に伝えて共感を得るという部分が、なかなか弱いのかもしれないと感じました。

太田：
ありがとうございました。次の質問に移ります。教育の現場で、男女のお金の学び方や興味を持つ分野に違いを感じることはございますか。また、女性が「お金は苦手」と思い込まないための工夫についてお聞かせください。

島：
女子学生は「授業の成績に関わる」となると、一気に集中力が高まります。金融そのものに関心はなくても、成績のためなら真面目に取り組むのです。一方で男子は「成功物語」などが有効でしたが、女子にはそうした手法はあまり通用いたしませんでした。結局「学校の勉強なのだからやりなさい」と伝えるのが最も効果的であったというのが私の経験です。

永沢：
ある証券会社の方から伺ったお話ですが、女性は熱心に投資教室に通うものの、なかなか実際の投資行動には結びつかないそうです。その殻を破るためには、小規模なグループ（ピアグループ）を作り、自身の経験に基づいて意見を述べてもらうことが有効ではないでしょうか。承認欲求や評価を気にする面があるからこそ、その心理的障壁を取り除いてあげることが必要なのかもしれません。

太田：
では、金融経済教育活動での気づきを今後どう生かしていくかという点に進みます。教育を実際の行動（実践）に移すために、どのようなアプローチが有効でしょうか。特に女子大や女性向け教育の現場で必要な支援は何でしょうか。また、J-FLEC として克服すべき最大の課題はどこにあるとお考えですか。

永沢：
非常に重要なのは「キャリア教育との連携」であると考えます。特に就職活動の時期は「給料を得て独り立ちする」ことへの関心が高まっておりますので、そこに具体的な情報を提供すべきです。また、パーソナルファイナンスだけでなく、コーポレートファイナンス的な内容についても、有用であると理解されれば非常に貪欲に学ばれます。キャリア形成と結びつけることが重要だと考えます。

大友：
J-FLEC としては、いかに「自分事」として捉えていただけるかが課題です。生きていくうえでお金は重要であり、自身の行動次第で変えられると実感した瞬間に、受け皿としての安心な場があることが分かれば、行動は変わるはずです。地道に全国展開していくことが肝要だと考えております。

島：
女子学生に対しては、実際に活躍している女性ロールモデルを招いて話をしてもらうのも一案です。もう一点、女子学生は「良い人に見られたい」という傾向が強いように感じられます。そこでクラウドファンディングなどの話をいたしますと、寄付を通じて困っている人を助ける仕組みとして関心が高まりました。現実の世界で努力している人を支援するといった実践的な話は、女子学生に響く可能性があると感じております。

太田：
最後に、これから「女性とお金の力を高めるために大切だと思うこと」を一言ずつお願いいたします。

永沢：
「経済的な自立」がいかに重要かを早期に認識する機会を作ることです。もう一つは「相談する力」です。一人で抱え込まず、正しい知識を持つ信頼できる人に相談すること。一人で勉強するだけでは限界があると考えます。

大友：
実際に女性が自身で経済的に自立するという「事実（ファクト）」を積み重ねることが重要です。家を買う、ローンを組むといった具体的なアクションは、長期的な展望や自身のキャリアパスを考える契機となります。

島：
そもそも女性が真面目に働けば、適切にお金を稼げるような制度にすべきです。日本の大組織における男女差別は、先進国のなかでも異常であると考えます。女性が置かれている経済的環境や制度が不当なのです。我々は有権者ですから、そうしたことを踏まえた行動が必要だと思います。

質疑応答

質問者（オンライン）：
金利と債券価格の理解は、それほど重要ではないのではありませんか。投資はギャンブルだという誤解を解き、期待収益率がプラスであることを理解してもらう方が重要ではないでしょうか。

永沢：
資産形成において債券ファンドは一般的ですので、やはり理解しておくべきだと考えます。また、債券と金利の関係を知ることは、世の中のお金の動きを理解するうえでも非常にダイナミックで興味深い学習になります。

質問者（会場）：

特に「リスクを取って投資をする」ことをどのように教育していくべきでしょうか。公的な機関である J-FLEC などの役割も含め、どのようにお考えでしょうか。

島：
一案として、何も選択しなければ自動的にグローバルインデックスなどで運用が開始され、不服であれば拒否できるという「デフォルト設定」を活用する仕組み（ナッジ）も必要ではないかと考えております。

太田：
投資を開始することで、なぜ経済が動くのかといった新しい世界が見えてまいります。一方で、投資によるダメージで人生が破綻しないよう、制度的な手当も重要です。

質問者（オンライン）：
扶養制度などの「男性に頼れる制度」を見直すべきではないでしょうか。これが金融知識を学ぶ妨げになっているのではないですか。

永沢：
全く同感です。多くの女性が自立の重要性を認識し、制度を変えていく力を皆で醸成していけたら素晴らしいなと感じております。

太田：
「ジェンダー格差」という大きな言葉を用いましたが、究極の目的は個人が自立することにあります。そのためには知識が必要です。皆様のファイナンシャル・ウェルビーイングが良好なものとなりますよう祈念いたしまして、本日のシンポジウムを終了したいと存じます。ありがとうございました。

閉会の挨拶：粕谷　美沙子　昭和女子大学教授
本日は多数ご参加いただき、誠にありがとうございました。本大学院は、持続可能な社会を目指し、新たな価値を創造する力を養うことを目的としております。リカレント教育やリスキリングの機会として、オンラインで受講可能です。多様な背景を持つ方々と共に学び合う環境をご用意しておりますので、ぜひ一歩踏み出していただきたいと願っております。
https://www.swu.ac.jp/graduate/cont-ed/